かい覚院様ゟ
御詠歌

544
セ
15

清容和歌

544
セ
15

九州大學圖書

九州大學圖書館
昭和 24. 7. 13
184019

544
セ
15

序

清容翁ハ年来和哥数寄の好きこめ帝の
ならひ入ためなかにゝもにゝ詞の上ハ帝にも文
世道に好事無遠きあひともに久世道
にまかせ門弟と成けく風雲の視聴なりし
にてなむ次に筆ハ代ちや哥の事
多くの其事しゝ人生好むこえ無尽ミし
なりく清容翁の書世代もなり
無言情なりなり無ゆらしまねにて給し

私云廿八日葉紙をもつてあつめ書写す一冊
となし其外紙をとし給廿八日に成
て入筆畢

享保十一丙午歳

秋廿八日　　　梅屋主人書

立春

高砂の山も霞のうちこえて年たちかへる春の明ぼの

兼并　立春

冬かれの木々の梢もいつしかと花や立春まちてさく覧

元旦

あらたまの年のはじめにあふ日の光ものどけき峯の山の端

世をいのる心は代々の末かけて君が八千代の春をこそまて　吉備

明ぬればかすみにこめて立春の山の端や高き春の色もみすらん　よみ人

山家

音羽山嶺にもみちも中々に紅葉にかゝる音羽山の瀧

霞隔遠樹

夕浮ぶ春の霞の立こめて浪路も見えぬ遠かたの舟

浦霞

もしほやく海士のとまやもかすみつゝ霞にこもる明石の浦浪

鶯

まちしらぬ春の梅に咲けるより来鳴く声の聞えそめぬるや鶯

柳上鶯

河そひの柳にもなびくる青柳の糸に乱れて来鳴く鶯の声

梅始開

春寒み雪消ぬまに梅なれやはつ花ながら咲初むる梅

翫梅

河路なる人をさそひに咲く花はにほふ香さへも梅の花

月前梅

大空は霞ならねど影やどる梅の香添へて月影

我宿の梅のにほひに咲る梅の花の香も折から風の吹

梅雪

一木より川辺に咲し梅の花見し春の雪のしら雪

垣梅

垣こし垣ねの梅か嫁して今宵新枕にまた夕ゆ

梅薫袖

風静か吹ける風も紛れて今ゆるゝ袖にうつる梅か香

梅薫枕

園生にも吹入る風はさやけくて枕に嫁して今も梅しく

小夜ふかくさて吹すさむ風さそふ春の枕にうつす庭の梅か香

夜梅

夕月夜ほのにもくもる空なれは新枕なれ梅かゝに春風吹

雪中夜梅

くれなゐの月さへも白き夜の雪にすへたる雪も梅か枝

月前桜

今宵しもとし経月にかはることもなき庭の桜かなと嬉しかる

春

春なれは心の内も嫁して君かおもふ夜はつる春風

初春

立帰る玉の井にとし一夜ふる春風のうつる鏡

[illegible]春

桃さくら咲かハ一しほ我宿のさくらの色ぞなき花もなし

花鶯多春

さく花に鶯きなく春の野に咲花も皆鶯の声

椿寿八千春

我君の御代ハかきりもあらし椿はや八千とせの春

春曙

大空も霞の衣かへる春雪も消ゆく山の端

さくら咲梅の花の梢にも[illegible]

明石の浦の[illegible]舟のやすらふ[illegible]

帰雁

[illegible]一つらの[illegible]

藤

[illegible]藤の花[illegible]

雨中藤

[illegible]藤の[illegible]

時鳥

[illegible]

[illegible]

杜間郭公

時鳥鳴つる杜のこすゑより人にしらるゝ声そのこれる

雨中時鳥

五月雨はれぬよもすから幾度も声をたゝしく雨のしたなる

卯花

植置し庭の卯花咲ぬれは山ほとゝきすいつとなくまつ

夏月

有明の月はかすみの雲間より涼しき影を夜のよの月

盧橘

うつりかにむかしをしのふ袖の香にいまもかはらぬ花たちはなの

花ちらし風の吹にもあやなくこそ匂ふらん軒の橘

夜盧橘

橘のかほるこよひのねさめにはむかしの人を思ひしる枕

浦蛍

うら風にふかれてこれる浪の上にすゝしくもゆる蛍かな

納涼

山のはにかゝれる月のよもすから涼しくしのふ風の音かな

七夕

七夕は逢よのすたれかけてまち歳秋くらぬ契なりけん

七夕の契るこそあはれなりしや星の光秋のゆふへの空

残るねいろせぬや夜七夕わか待逢よの契なる覧

初秋

かくはしき秋の姿をみつゝ萩すゝき吹るも風もろし

月前雁

雲ものなれや秋の月は鳴もむかしの衣かな

麻

書ひの尽ぬ事も恋のかりとの雲に男麻のかつ

夕虫

草村にまよふ虫の音稲葉そよくいと哀しさ秋の夕暮

庭夜虫

枕残るあさちか庭のまもくすゝむわよいろ見る秋の夜なく

暁霧

きえ残る暁月の秋をまよふしたは霧かゝる山の端

月

なかめよとよゝにし夕べはさやかにてよなかのわか良の月のさやけき

八月十五夜

雨雲も月もあらそふ夜や吹まよふ嵐も清き光添ゆる
よそに残し中空の兎は雨雲の晴ゆく月の影ぞうつろふ

九月十三夜

こよひの名に光添ふ袖の上に移るも清き長月の影
世にまれに名ある長月の光まさる秋のよの月
猶やまし雲路つたふ夜半のまちても月の影なれ

待宵月

まち出る月も空たのめし明ぬ夜の月やいざよひなる

十六夜月

久堅の光もさやかにいざよひの月の影をまちえしかな

月前萩

長月の影も露にてらしつつ萩の上露

寄月祝

積る山光さし添ふ月影の幾千代かけぬ秋にもまさる
うき世にも君が影をまつもしるき雲井の月影

田家

数々てなく光添ふ村雨に秋の夕の露けき

山家

霧何夜こえて梢ハ紅葉して紀よ成るこれ山

庭紅葉

夜なかきわ隠よ梢のこまよて深くも深き庭紅葉

秋夕

立こもる鳥よ谷て下露渡る林の夕暮

暮秋草

いつしかハ暮ぬ秋や虫の音もさる枕残る庭猶しる草

時雨

神無月木々の紅葉も淋しさよ音る時雨庭の淋しさ

山家時雨

いつれ急ぎ来ても見て庭もすさる時雨こそ夜る見えの山里

落葉

霧深く手も見す山路よこゝ梢の流るる木の葉の紅葉

朝落葉

朝あらし時雨紛れ小萩よりて散る庭の紅葉

湖氷

いつよ寒も浪なき入る諏訪の湖に氷の橋わかす猿人

雪

降つミし庭の白雪解やらて松のあらしも音もなし

立返のとしのくれやなれなれの朝の出ハ皆白妙に雪ハ積る

降積る竹の葉の音聞ゆなりひまに夜おちて庭の苔

初雪

朝ぼらけ吹やはらふ松の葉のあと人寂しく初しる雪

庭の面にまだ岩の苔深くの初雪

夜雪

月もなき夜ハ光ハ更て小笹に積る庭のしら雪

雪晴月

吹まよふ降つもる雪のうちに月の影ハゆく

雪中燈

明けぬ夜しるへの庭の上に積る雪

雪中鳥

白妙に積る庭の宿の木にかゝる

冬月

寒き夜ハ霜の年の月

早梅

春きぬと枝のしらぬ梅の花

冬ながら雪は散つゝ咲梅をなか／＼香ゆゑ無きけれ驚

春くれば梅にも咲る梅花の色より香する宿の朝風

ことしより咲初る梅の咲梅花やうくひすのなく

寄鶯

春の野に入ぬる鶯の声きけば[illegible]

見恋

見る毎に[illegible]もなき[illegible]の[illegible]

逢恋

[illegible]の[illegible]

逢不逢恋

逢ふ事は[illegible]契りなりけり[illegible]

寄篇恋

[illegible]

寄煙恋

立のぼる思ひの煙[illegible]人をこそ思ひ

[illegible]

よろづ代の[illegible]

松添栄色

常盤なる松の葉にも日をのへて緑かはらぬ万代の色

雲

山の端は雲にまかひて見ゆるかなたにやたつらん峰のしら雲

述懐

これのみの栄之一曲の那とさくらものかゝる美氣の中

世の人かれ気の間とふさらん流さ秋川かたのちり袖

枝毎にさける梅のちりてそさくはいなくもなし
きのふ

ここの咲ちりぬ

ちこまく離咲る梅花のは清く香も絶ゑぬ雲

河の辺に梅咲けりく見わたせはむかれ

のこりのし残雪のこれ梅の香れ盛ぬ

ときさへしめ

詠もよしと云梅をみて風まつ一夜も女の云の葉

婦君れかもすみ梅の清く香氣は

見も人はもかくしもかへる

見ときやと云る一枝はかをも聞くらすゆる梅の花

親君なくとも梅の清くそ春花

かくしそ

君に添く泪々の袖に泣く泪て多かれかしの梅の一えだ

咲ちらば我まてこそ人なき命
泣く〳〵も梅の花につゝみかねて

新造が梅の花をも折とらめ
親がかりとて梅を捨て泣ぬればよしや人とらめ

まよひ給ふる

いとゞやも咲やたちの桂枝を送りゆく花の朝の用意に

人のおもひは東の梅の色香みえし

あさましやうつゝに泣く〳〵しまふ

泣く人ごゝろ送りゆく花の残りて桜松の別れの梅の哀れなり

さてもすゞしき庭の中にある桜が親の身をまつ梅

こゝろ添ひまゐらせん身の世に消えなん思ひ

出にく

さるゝとぞ源の蔵は嘆き庭の中にある桜が梅をかゝへつ

義龍の東に梅をみつけ菅原の公

添ひまゐらせんとて泪を梅につくり

御行くにさえ君を詠みも見えず

涙つゝしみ

西海のはてへ君をながして菅原と称するさへあはれなり

てらみかともい此花一枝わかち

咲なしぬ秋の桜かなをもかゝわる枝に風も秋の前へ

はらゝま京桜も見たきとて　庭前

桜の花ひらき見たる事なきとて　此花

つらゝ義龍の夜へよりて帰りける

去書状ハ風かれたよりよとてきんと庭の桜花咲きたるを見よ

てらみへし京のきよし

主おきく乱つよりせん桜花春も山道の出づる人

庭かれゝみたりよりのかれ見つ花様

これまでは月の咲花の花ハ花れ枝かれて春風

庭かれさのゝ枝し挂置なる中に一りと

まゝやゝ咲花を見てし

移し挂ゝに桜木の中ともにとてもやゝ咲花　見所

三月三日時をしめ大雪かれ降りまハ

桃さくら花咲降ハいとめよしと春にも去て人雪に桜降

親かれゝ人流し如しも春にも此花

よりゝ千するとこゝめ

咲家かれたる人のなれは春に日よりゝや流し此三九のひとさ

卯月はほとゝぎすの鳴はじむる頃なれば
時ならで卯月の末か夕暮まで待も惜しまして鶯待夕暮
集まりし事あまた月を見て
秋の月の夜は月影からぬ都八経
八月中の夜は名月とて賞翫する
月の名
の月との空はれて月の光八
義経は東尾張落
庭の尾は見えやしろ

梅に鶯の一句
霞なつかしきわる夜の梅に鶯なつかしき
見は東の方の
な
わ
長英
長英
見

うしおろに浮むとて

和歌の浦にかも初八千代なれへおもふ事かなひ侍りぬ

庭すみ花のあるじへありがたくすぐれ侍るとて

浜つゆやきみ庭の花のあるじ見とれやさしさかりの花や咲

義龍下国のおりふし梅かはなさかりなる頃

咲ぐさく　さすがにすまし月の前のちる

かへし　梅やさかりの林にしかれ咲なれや

みをしめし

都路に咲ける桜や梅の枝かれ花は浜つゆもかくる道とかく

姉君の果浅黄故終此にまかりて

よいて路ゆへ

扇ぎ九離に咲るこめ秋すみて故烟さても残す菊花一りと

時雨すみ九月霧すみ深菊さしは

咲ぐさすみ九月さへ御紀の時雨なすこしに霧深し

松かげのきく庭にそ花ぞ送てとて

君が代やあまつさへ千歳も花の種なる花れ一りと

玄冬の追善とて

なれへすみなりものや情無御名のこすくる世の中の空

年頃経て二親に逢ひて詠る

よめる

日に増りて老たらちねに逢ふこれや子と孫の身を思ふ心

述懐中とこそなりて

たらちねのかくれて後は人の心ぞなかりし

跋

凡集る所の和歌百首の前も
清宮新詠なりまとめしくこゝろよ
某所し　義龍并に　頼継也　これ
より傍筆　添所也

丙午ノ
頃

集者云

九州大學圖書印